

湘南即事

戴叔倫

盧橘花開て 楓葉衰う
門出て 何れの処に 京師を望まん

沅湘日夜 東に流れ去り
愁人の為 に住まること 少時もせず

【作者】戴叔倫（七三二～七八九年）中国・唐の詩人。字は幼公（ようこう）、または次公（じこう）。潤州金壇（江蘇省）の出身。

安史の乱の兵乱を避けて波陽（江西省）に移住し、もっぱら學問に励み、蕭穎士の門下に入つて随一と謳われた。八〇〇年、進士に及第、杭州新城県（浙江省富陽）の令などを務め、真面目な勤務ふりを認められて、撫州（江西省臨川）刺史・容州（広西壮族自治区容県）刺史兼本管経略使を歴任、善政を敷いて住民に慕われた。のちには辞職して道士となつたが、間もなく死んだ。今、『戴叔倫』二巻が残っている

【語釈】*湘南即事…湘南（現・湖南省湘潭県の西）地方の様子を詠じた詩。 *盧橘…金柑（きんかん）の別名。また、枇杷（びわ）の別名。

*衰…木の葉や髪の毛のように一つまた一つと、落ちて老いおとろえてゆく。 *京師…天子のみやこ。帝都。 *沅湘…沅（げん）江と湘（しょう）江。共に湖南省を流れて洞庭湖に注ぐ川の名。 *愁人…悩みのある人。物の哀れを感じる人。詩人。ここでは作者を謂う。

【通釈】金柑（きんかん）花が開いて、カエデの葉が一つまた一つと散つていき。町の城門を出た郊外では、どちらの方に都を眺め（られ）るのか。沅（げん）江と湘（しょう）江は、昼となく夜となく東に向かって流れて。物の哀れを感じる詩人（作者）のためには、暫くも止（とど）まつてはくれない。

【作者】戴叔倫（七三二～七八九）中唐の詩人。字は幼公、潤州金壇（江蘇省金壇区）の人。若い時、蕭穎士に師事し、門下随一と言われた。湖南江西節度使、李臯に仕え、のち撫州刺史（長官）として治績を挙げ、開國男という称号を賜った。其の後、容管（広西自治区）経略使として蛮族の鎮撫に成績を挙げ、徳宗から詩を賜った、晩年は道士（仏道を修めた人）となり、五十八歳で没した。「戴叔倫詩集」二巻がある。

【語釈】○湘南…湘水（湘江）の流域一帯（湖南省）。○即事…即興詩の意。○盧橘…ゆずに似た柑橘類の一種。○楓葉…トウカエデの葉（マンサク科の落葉樹）。○京師…都、長安のこと。○沅湘…沅水と湘水。共に湖南省を流れて洞庭湖に注ぐ。○愁人…心に悩みのある人。ここでは作者を指す。

【通釈】盧橘の花が咲き、楓の葉は色あせて散つてゆく。望郷の思いに耐えかねて、門の外に出て遙か都、長安の方を眺めても、遠くて見る事も出来ない。沅水も湘水も、昼夜を分かたず滔々と東に向かつて流れてゆき、少しの間も郷愁に沈む私の心を慰める為にとどまってはくれない。